

宗学院公開講座（二〇一三年度）

浄土真宗の本尊

藤 田 宏 達

はじめに

ただいま、過分なご紹介をいただきまして恐縮しております。思い起こしますと、だいぶ前の平成七年十一月、私は龍谷大学の真宗学会大会の時に記念講演をさせていただいたことがありまして、それがたしかこの講堂でした。その時は、「念仏と称名」という題で話をいたしました。当時、私は大谷大学大学院の「真宗学研究」という科目の非常勤講師をしておりまして、真宗学の勉強のつもりでこちらに伺いました。その講演の記録は、『真宗学』九四号（一九九六年）に記載されていますので、ご覧になった方がいらつしやるかもしれません。

私は、もしできれば、親鸞聖人のお年まで娑婆にご縁をいただきたいと願っておりますが、それにはまだ四年ほどある老残の身でありますので、すでに学会もほとんど退きまして、講演などもすべてご辞退申し上げています。ただ昨年より大谷派で董理院の院長という役職を仰せつかりまして、過日、勸学寮の寮頭でいらつしやる徳永一道先生の所にお伺いしました際に、今回の講座のお話があり、さてどうしようかと迷いましたが、宗学院の報恩講の行事の一つでもあると承わり、結局お引き受けいたしました。しかし、何をお話したらよいのかと決めかねていま

したところ、大谷派では親鸞聖人七百五十回御遠忌法要が終わった後に、阿弥陀堂の修復に着手しまして、今も覆いを被っておりませけれども、それに先立って、ご本尊を御影堂に動座するという式を執り行いました。その時に記念講演ということで、御影堂において「御本尊をお迎えして」と題して話をいたしました。その後、その内容を「伝道ボックス」というシリーズに収めたいということで、少し書き足して『真宗における本尊』（東本願寺出版部、二〇二二年）という小冊子を出しました。これをたまたま徳永先生にお見せしましたら、今回はその本尊の話がよいということになりました。そこで、講題を「浄土真宗の本尊」と改めて、この小冊子に書きました内容に沿ってお話しさせていただくことにします。限られた時間でございますが、かいつまんで申し上げますので、詳しく内容をお確かめいただく場合には『真宗における本尊』をご参照いただければ幸いに存じます。

一 阿弥陀仏とは？

1 阿弥陀仏の原名

浄土真宗（真宗）のご本尊は、申すまでもなく阿弥陀如来であります。「阿弥陀」はインド古代の言葉、サンスクリット語（またはその俗語形）を漢字であらわした音写語であり、「如来」はタターガタ（*tathagata*）の意訳語であります。このタターガタという呼称は、すでに釈尊の時代から修行を完成した人をさして使われており、ブツダ（仏）と同義語的に用いられていることは、ご承知の通りであります。

ところで、「阿弥陀」についてですが、サンスクリットの原名はアミターユス（*Amitayus*）とアミターバ（*Amitaba*）の二つで、この二つの名を共に音写したのが「阿弥陀」と呼ばれたと考えられます。このうち二つの原名の前分に共通して用いられているアミタ（*amita*）という語は、「量られた」という意味の過去分詞形に否

定を示す接頭辞ア(ə)を付けた語で「無量の」という意味です。この語の後に「寿命」を意味する中性名詞のアーユス(ayus)を付けて合成した男性名詞がアミターユスであり、「無量なる寿命を持てる方」、すなわち寿命無量の仏を意味します。アミターバも同様にアミタという語の後に「光明」を意味するアーバー(ābhā)という女性名詞を付けて合成した語ですが、仏名としては男性名詞になりますので、合成語の後分ではアーバ(ābha)に変わって「無量なる光明を持てる方」、すなわち光明無量の仏を意味します。

私がかねて、アミターユスとアミターバの両方を音写したのが「阿弥陀」であると主張しているのですが、多くの方々は必ずしもそうではなくて、阿弥陀はアミタすなわち「無量」であると、そういう意味でお採りになる。しかし、「無量」という名の仏さま、つまり「アミタ・ブツダ」という固有名詞の仏さまはおられないわけです。アミタは原語の中では形容詞的に用いられておりますから、それをアーユスやアーバと切り離してアミタだけに解しますと、「阿弥陀」という仏にはなりません。阿弥陀仏は、寿命無量のアミターユスと、光明無量のアミターバの両方を同じように音写した仏であると私は考えております。

ただ、「阿弥陀」という三つの漢字が、どうしてこの二つの仏名を写しとったのかということにつきましては、学問的に面倒な議論のあるところですが、いまその代表的見解について少し触れてみますと、アミターユスとアミターバというサンスクリット語を俗語風に発音しますと、前分のアミタはアミダ(amida)となり、後分のアーユスとアーバは、その最後の母音もしくはシラブル(音節)が脱落して、ほとんど聞こえなくなるため、どちらも同じようにアミダとなり、それが「阿弥陀」と音写されたのではないかと推定されます。原語の音韻変化を試みにあげてみますと、Amitayus → amiday (or amida) → amidaとなり、また Amitābha → amidābh (or amida) → amidaとなつて、「阿弥陀」はアミターユスとアミターバの両方を音写したと言えます。言い換え

れば、この二つの原名のどちらにも対応する完全な音写語と見なすことができるのです。ちなみに、この場合、音写語として用いられる「阿」「弥」「陀」という漢字は、それぞれの字義とは関係なく、単に音を表記する一種の記号として使われたと見るべきでしょう。また、最後の母音もしくはシラブルが落ちて音写されるというのは、古い漢訳から多くの用例が認められることであります。最近ではガンダーラ語の研究が進んで、アミターユス、アミターバは最初にガンダーラ語で表されたのではないかと主張する方もおられます。ガンダーラ語でなくとも、ガンダーラ語風に発音したということもあり得るわけです。仮にガンダーラ語とした場合でも、音韻変化は省略しなくても、中国に伝わった時にはアミダ (amida) になることは同じであると考えられます。

この「阿弥陀」に似たような例が「仏」という音写語についても言えます。いま常用漢字として用いられている「仏」は、私が調べた限りでは、中国で古くから用いられた略字ですが、現在、中国ではこれを使わず、もっぱら正字の「佛」を用いています。この「佛」はブツダの最後の母音またはシラブルが脱落した音韻変化、たとえば buddha → buddh → but (or bwt) に対応した音写語と推定されます。普通、「佛」という字は「佛陀」の「陀」を省略したのだと言われるのですが、そうではありません。「佛」の方が古く、この一字だけで完全にブツダを音写したものと解すべきであります。

2 アミターユスとアミターバ

ところで、アミターユスとアミターバという原名が浄土三部経においてどのような形で用いられているかという問題を尋ねることにします。

三部経の中で『無量寿経』（『大無量寿経』）と『阿弥陀経』の二経にはサンスクリット原典が現存しております

が、その経題は、どちらも『スカールヴァティ・ヴェーハ』(Sukhavatī-vyūha) と言い、私は「極楽の莊嚴」と訳しています。ところが、漢訳の二経では、この原典の経題とは違って、「無量寿」と「阿弥陀」という仏名を経題として訳出しています。「阿弥陀」は、先ほど申しましたように、アミターユスとアミターバのどちらにも相当する音写語ですが、「無量寿」はこの中のアミターユスに当たる意識語であります。

そこで、『無量寿経』の仏名についてみますと、経題の示すとおり一貫して「無量寿」を用いており、「阿弥陀」を用いることはございません。ただ、アミターバに相当する「無量光」という意識語が、いわゆる十二光仏の最初に一回だけ用いられています。このほか、「無量」という訳語も、東方偈(往觀偈)の中に「無量尊」や「無量覺」という形で出て来ますが、これは偈文のため、「無量寿」を省略した形と推定されます。

では、サンスクリット原典の上ではどうなっているかと申しますと、無量光に当たるアミターバのほうが、はるかに多く本名のように用いられており、アミターユスのほうは、アミターバ仏の寿命が無量であることを述べる箇所にならずに言及される程度です。つまり、『無量寿経』においては、インドの原典の上では、アミターバが主として用いられているのに対して、漢訳ではアミターユスに相当する「無量寿」を主として用いているのです。どうして、このように変わったのかと申しますと、中国では「無量寿」と「無量光」という二つの訳語のうち、「無量寿」のほうが道教的な考えの影響で不老長生を求める中国人の考え方にふさわしい訳語と見られたためと推測されます。『無量寿経』が翻訳された時代には、すでに中国においては儒教や道教の流布による独自の思想文化が形成されてきましたから、翻訳の際には当然のことながら中国的色彩が反映しているのです。

次に、『阿弥陀経』についてみますと、『無量寿経』とは違って、経題の「阿弥陀」が一貫して用いられております。ただし、いわゆる六方位の西方段に「無量寿」が一回だけ用いられます。しかし「無量光」は使われていま

ん。ではサンスクリット原典はどうかと言いますと、アミターユスが主として用いられており、『無量寿経』の場合と逆になっています。そして、アミターバはアミターユス仏の光明が無量であると述べる箇所に出てくるだけです。ところが、漢訳ではこの箇所でもすべて「阿弥陀」で通してあります。

次に、『観無量寿経』についてですが、ご承知の通りサンスクリット本がありませんので、その成立をめぐって種々な見解が示されております。この経典の仏名は、経題に用いられているように「無量寿」ですが、そのサンスクリット原名は明確に想定することができません。仏名としては、ほかに「阿弥陀」も用いられていますから、あえて原名を想定いたしますと、アミターユスとアミターバの両方になります。「無量光」はこの経典にも出てきませんので、原名をアミターユスとされる方が多いのですが、私は適当ではないと思っています。

このように、浄土三部経の用法をサンスクリット原典と比較して尋ねてみますと、非常に特徴的なことが判明いたします。すなわち『無量寿経』ではアミターバを中心として説きながら、アミターユスと同じ仏を指し、『阿弥陀経』ではアミターユスを中心として説きながら、アミターバと同じ仏を指す。つまり、この二つの経典で中心となる仏名は違うけれども、結果的に同じ仏を指していることが分かります。これが阿弥陀仏を主題とした二つの浄土経典の大きな特色なのであります。

大乘経典の中には、阿弥陀仏に言及する経典が非常に多くあります。初期の代表的な大乘経典の一つである『法華経』には、阿弥陀仏が何度か言及されていますが、その原名はサンスクリット原典によりますと、アミターユスであります。アミターバも説かれますが、それは後世附加された箇所に出るだけです。本来説かれていた『法華経』の阿弥陀仏はアミターユスであり、寿命無量の仏であると言えます。

これに対して、同じく初期の大乘経典の『華嚴経』にも阿弥陀仏が言及されますが、現在のサンスクリット原典

を見ますと、その原名はアミターバであって、アミターユスは仏名として明確には触れていません。ですから、『華嚴經』の阿弥陀仏はアミターバ、すなわち光明無量の仏であると言うことができます。

そうしますと、同じく阿弥陀仏を説く經典と言いましても、經典によつていさか異なることが分かります。要するに、阿弥陀仏がアミターユスとアミターバ、すなわち寿命無量と光明無量をあわせた仏であることを明確に説き明かしたのは、『無量壽經』と『阿弥陀經』の二經にはかならないのであります。

ところで、これまで皆様方にあまり親しみのないサンスクリット原典に言及してきましたが、親鸞聖人の時代には『阿弥陀經』については、そのサンスクリット原典が悉曇文字で書かれた形で比叡山に伝来し、かなり流布しておりましたから、聖人がこれをご覧になることができたのではないかと推測します。しかし残念ながらその機会はついになかったのであります。他方、『無量壽經』については、その原典はまだ日本に伝わっておりませんでしたから、ご覧にならなかつたのは当然であります。

しかし、この事實は親鸞聖人がサンスクリット原典に無関心であつたということにはならないと思います。聖人は『大無量壽經』の助顯として漢訳異本を参照されるに当たつて、特に菩提流志訳『無量壽如来会』を重用されていますが、これはサンスクリット原典に最も近い、いわゆる「新訳」であり、聖人が『無量壽經』の原典的形態をこの新訳の中に読みとろうとしたことを示すと言つてよいと思います。聖人が新訳を尊重されたことは、たとえば『入出二門偈頌』において、旧訳の「天親」は訛りで、新訳の「世親」が正しい（『浄土真宗聖典全書』巻二、三一五頁）と述べられている点からもうかがわれます。もつとも、聖人の著作の中には、直接サンスクリット語に言及した例は認められませんが、晩年に、法然上人の言行録を輯録した真筆本『西方指南抄』には「阿弥陀といふはこれ天竺の梵語なり。こゝには翻譯して无量壽佛といふ、また无量光といへり」（国宝本影印『西方指南抄』上本・上

末、同朋舎、二〇二二年、七四―七五頁）とあり、サンスクリット語の「阿弥陀」がアミターユスとアミターバの二つに対同する仏名であることを的確に記しておられます。これと同じようなことは、聖人が関東の門弟慶信に返信した書簡の中にも認められますが（『浄土真宗聖典全書』巻二、七五三頁）、これについては小冊子の中に引用しておきましたので、今は省略いたします。いずれにしましても、サンスクリット原典は親鸞聖人と関係がないという説があるとするれば、決してそうではないと私は申し上げたいのであります。

3 阿弥陀仏の由来

それでは、いったい阿弥陀仏は仏教の歴史の中で、どのような由来・起源を持っているのか、という問題に移ることにします。この問題については、一般の方々や学界の間にも色々な説がありますが、いま大まかに仏教外起源説と仏教内起源説の二つに分けてみます。

一つは仏教以外に起源を求める説ですが、これは主としてインドより西方イランのゾロアスター教、特にその光明崇拜の影響を受けたとする説であります。最近でも、仏教に浄土教が生まれたのはゾロアスター教の影響によると説く一般書が出ていますが、私はかねてからこのような説の論拠を検討して、受け入れることができないと主張しています。しかしそれにもかかわらず、一般の方々には依然として広く行われているのです。このほか、仏教外起源説としては、古代インドのヴェーダからヒンドゥー教に至るまでの諸種の神話に由来を求める色々な説があります。

こうした諸説に対して、もう一つの仏教内部の起源説ですが、その中で、結論を先に申しますと、私は仏教本来のブツダ観の展開の中に阿弥陀仏の由来を求めるのが最も妥当と考えております。原始仏教、これは釈尊の時代を

中心とした仏教を指しますが、その原始經典の中に、すでに釈尊の寿命の永遠性に対する関心が表明されており、また仏と光明との結びつきについても、種々な教説が説かれていて、それらは先ほどから取り上げたアミターユスとアミターバの原名に対応すると見ることができるところです。原始仏教に続く部派仏教のブツダ観を見ても、特に大衆部系統の中に同様にアミターユスとアミターバの觀念に相当する説が認められます。こうした点からアミターユスやアミターバという仏名は、もとは釈尊とは別な仏をさすのではなく、釈尊を違った言葉であらわしたものと見ることが出来ます。言い換えますと、この二つの名は歴史的存在としての釈尊を新たに解釈し直した特徴的な表現と言ってよいのではないか。すなわち、アミターユスは寿命の時間的な永遠性という面から、アミターバは光明の空間的な遍満性という面から、釈尊の仏たる所以を表示した名であると思います。無量なる寿命というのは、迷える衆生がいる限り、いつまでも寿命を延ばして救うという仏の大いなる慈悲をあらわし、無量なる光明というのは、暗闇に落ち込む衆生にどこまでも光を与えて救うという仏の大いなる智慧を指していると言ってもよいでしょう。『無量寿經』と『阿弥陀經』は、いわば慈悲と智慧のこころをあらわす二つの名をあわせて同一視することによつて、釈尊が仏となつた、その仏の本質を最もよく表明することを説いた經典であると思います。

ただ、ここで注意すべきことは、このようにアミターユスとアミターバの由来をブツダ観の展開の中に求めることができるにしても、これは、阿弥陀仏が、原始仏教や部派仏教のブツダ観と同じ立場で説かれたものではないということです。原始仏教や部派仏教におけるブツダ観は、現在仏としては釈尊一仏の立場に立ち、釈尊以外の存在は認めません。ところが、阿弥陀仏は、現に西方の極楽世界に住して説法されている仏であり、現在仏という点では、釈尊と相並ぶ仏であります。ですから、このような仏が原始仏教や仏派仏教の立場からは認められないのは当然と言えましょう。

それでは、どのような立場から説かれたのかと申しますと、基本的には新しく勃興した大乘仏教の菩薩思想にもとづいたものと考えられます。菩薩 (bodhisattva) とは、「菩提 (さとり) を求める衆生」という意味で、元來は成道以前の釈尊を指し、さらに過去世にさかのぼって、その前生を指す言葉でありましたが、大乘仏教においては、これを普遍化して、菩提を求める求道者一般をあらわす用語と見なすようになりました。それは、出家・在家を問わず、すべての人々に成仏への道を解放したもので、その求道の内容を一言であらわしますと、一切衆生を救済せんとする慈悲・利他の精神を指しております。大乘の菩薩すなわち求道者たる者は、この高邁な精神のもとに、それぞれ利他救済の誓願 (本願) を立て、その完成をめざして修行する。この修行を完成することは、菩薩の自利利他の両方を完全に充足することを意味しますから、究極の無上の菩提に到達することであり、仏となること (成仏) にほかなりません。したがって、大乘仏教においては、現に多くの菩薩が同時に菩提を求めて行を修めつつある限り、同時に多数の仏が出現するという道理が認められねばならぬこととなります。ただ一世界に一仏という原始仏教以来の鉄則がございますから、それは他方の多世界に多仏が出現することを意味しているのであります。

ところで、阿弥陀仏の教説についてみますと、その思想的基盤が、まさしくこのような菩薩思想に置かれていると考えられます。『無量寿經』によりますと、阿弥陀仏は、過去久遠のむかし、法蔵菩薩として、大乘の菩薩道を完成して、この娑婆世界より他方のはるか遠く西方世界に出現された仏なのであります。ですから、阿弥陀の原名が、起源的には釈尊についての見方を受けたものであるにしても、しかし原始仏教や部派仏教の伝統的見方をそのまま受け継いだものではなく、それらとは思想的立場を異にしていることは明らかです。阿弥陀仏は、いわば歴史的存在としての釈尊が大乘の菩薩の理想像として思想的に見直され、救済仏として広く願われて、西方極樂浄土に出現された仏である、と言ってよいのであります。

先の小冊子には書いておりませんが、なお最古の阿弥陀仏立像台座について少しばかりご紹介いたします。これまで、阿弥陀仏の仏像はインドにはなかったと言われていました。ところが、一九七七年にマトウラーの郊外からアミターバ仏の立像の台座が発見されました。像容全体は欠損していますが、台座に残る両足から立像であることが確かめられます。非常に重要なことは、この台座にブラフミー文字の刻銘があり、アミターバ仏であると明確に記し、しかも年代までも記していることです。そこで、多くの学者が注目して取り上げていますが、後代の捏造品だとは誰も判断しておりません。今、マトウラーの博物館にございますから、インドに行かれた際には是非ご覧になって下さい。年代については種々な説がありますが、およそ二世紀前半のものだと見られます。そうしますと、中国の訳経史の上で「阿弥陀」の語を最初に用いたのは二世紀後半の支婁迦讖訳『般若三昧経』ですから、それに先立ってすでにインドにおいて阿弥陀仏の思想が成立していたというのが考古学的にも証明されたことになるわけです。

以上、阿弥陀仏に関して、小冊子『真宗における本尊』に沿って、概要を申し述べました。専門的な説明は割愛していますので、ご関心のある方は『浄土三部経の研究』（岩波書店、二〇〇七年刊、オンデマンド版二〇一二年）をご参照いただければ幸いに存じます。

二 本尊とは？

1 名号本尊

次に、本尊という問題について話を進めさせていただきます。「本尊」という用語は、仏教の各宗派において、根本の主尊として礼拝する対象を指し、仏・菩薩ほか色々あげられます。浄土教各宗では阿弥陀仏ないし阿弥陀三

尊（阿弥陀仏と両脇の観音・勢至二菩薩）を本尊といたしますが、浄土真宗（真宗）においては阿弥陀一仏に限るのを特色といたします。ただ、高田派では善光寺式一光三尊仏を旧本山の専修寺（真岡市）の本尊としていますが、これは旧本山に限るもので、宗派としては、他の派と同じく阿弥陀一仏としています。

このような阿弥陀一仏の本尊としては、文字で書かれた名号と、木像や絵像の形像をもつてする場合があります。このうち名号を本尊とするのは、親鸞聖人が初めて明確に用いられた本尊であります。もつとも、親鸞聖人と同時代の梅尾の明恵上人も「南無同相別相住持仏法僧三宝」つまり南無三宝という名字本尊を用いられていましたから、名号本尊というのは、当時すでに知られていたようですが、親鸞聖人の場合は、中央の名号の天と地に別紙を貼り足して、それに『大経』などの賛銘を書かれており、これはやはり独自の形式と見なされています。

親鸞聖人が入滅された後、本願寺第三代の覚如上人の頃も、当初は宗祖が用いられた名号本尊を継承しています。しかしやがて仏教各宗派と同様に形像の本尊を礼拝する風潮も出てきたようであり、その後、時の経過とともに、この傾向は強くなり、今日見られるように、本山や一般寺院の本堂においては木造の阿弥陀如来が安置され、お内仏には絵像の阿弥陀如来が奉安されるようになりました。もちろん、そうでありましても、親鸞聖人の独創と言われる名号本尊が、浄土真宗の本尊として重用される点では、現在も変わりません。

この名号には幾つかございますが、最も代表的なものが「南無阿弥陀仏」の六字の名号になります。この中で「阿弥陀仏」は、先に触れましたように、サンスクリット語を音写したのですが、「南無」という語も、同じくナマス (namas) を音写したものです。これは敬礼・礼拝の意味であり、漢訳の「帰依・帰命」などに相当します。現在、インドの人は挨拶するときにナマステー (namaste) と言って手を合わせます。これはヒンディー語ですが、もともなった表現は、古いウパニシャッドや原始仏教の聖典にも見出されますから、インドでは釈尊の時代にも使

われていたようです。ナマスのあとのテーは、サンスクリット語では与格形で「あなたに」ということですから、ナマステーというのは「あなたに敬礼（帰依）いたします」と言っているわけで、挨拶の言葉としては見事な表現と言えます。六字の名号の南無阿弥陀仏は、ナマス（南無）の後に阿弥陀仏ですから「阿弥陀仏に礼拝（帰命）いたします」という意味になります。ただ「阿弥陀」はアミターユスとアミターバの両方を音写した語ですので、六字の名号は、原語でいえば、「南無アミターユス」と「南無アミターバ」という二つの名号になります。この場合、文法の規則によってナマスの発音が「ナモー」と変化して、次の「ア」という語が省略されます。念のため、その原語を記してみますと、「南無アミターユス」はナモーミターユシェー (nāmo 'mitāyuse)、**「南無アミターバ」**はナモーミターバーヤ (nāmo 'mitābhāya) となります。この二つの原語には「仏」に相当する語はありませんが、もしこれに相当するブツダの与格形ブツダーヤ (buddhāya) を加えますと、「南無アミターユス仏」、「南無アミターバ仏」となるわけです。

このように南無阿弥陀仏をサンスクリット語であらわしますと二つの仏名になります。それを一つにまとめて、六字であらわしたのが、「南無阿弥陀仏」であります。仏典の中でこの六字の名号を初めて説いたのが、『観無量寿経』であり、この經典の上品上生段と下生段には「南無阿弥陀仏」がそれぞれ一回出てまいります。これは、インドの言葉の音写の形をとりながら、しかも二つの仏名を統合した名号であり、中国におけるすぐれて巧みな成語化であると言つてよいと思います。

ちなみに、本願寺派や高田派では、「なもあみだぶつ」と言われています。徳永先生にお聞きしましたら、アメリカ開教区では「なむあみだぶつ」と言われるようですが、これは大谷派と同じです。「なも」はインドのナモーに近い発音ですが、親鸞聖人の頃には「なむ」よりは「なも」と言うほうが多かったようです。聖人の直筆本『唯

信鈔文意』（『浄土真宗聖典全書』巻二、七一四―五頁上段）を拝見しても、そのように見受けられますので、おそらく聖人の読み方を受け継がれたものと推察されますが、いかがなものでしょうか。

ところで、親鸞聖人がご自身で書かれた真筆の名号については、これまで色々と研究がありまして、それらによりますと、まず六字の名号は現在西本願寺にあるのが唯一のご真筆でございます。それから八字の名号（南無不可思議光仏）、九字の名号（南無不可思議光如来）、十字の名号（帰命盡十方無碍光如来）があります。このうち九字の名号はどういうわけかご真筆が残っておりません。八字と十字の真筆の名号は現在、高田派本山にあります。それから、十字の名号が同じく高田派の妙源寺（岡崎市）に伝えられています。九字名号につきましては、高田派の真仏が籠文字の名号に讃銘を書いたものが残っております。真仏は、親鸞聖人より四年ほど前に亡くなっておりますから、親鸞聖人の在世に作られたということになります。『教行信証』『真仏土巻』には「仏はこれ不可思議光如来なり」とありますから、これに「南無」を付ければ九字名号になります。ですから、ご真筆がなくても、親鸞聖人当時に既に用いられていたものと推測されています。

これらの名号の由来を尋ねてみますと、真宗相承の祖師として七高僧がおられますが、その中でインドの世親（天親）菩薩の著作を漢訳した『浄土論』の最初に「帰命尽十方無碍光如来」とあり、また中国の曇鸞大師の『讃阿弥陀仏偈』の中に「南無不可思議光」とあります。親鸞聖人はこのような典拠にもとづいて、これを八字・九字・十字の名号本尊として重用されたのであります。

ちなみに、親鸞聖人は「南無」を「南无」という字で書かれています。「无」は、現在の中国では簡体字です。「无」と「無」の字の出自を求めますと、もとは書体の異なる文字と見られますが、「无」の字は、中国では古来「無」の異体字として用いられ、日本でも特に仏教書では「无」の字が先行して使われてきたようであります。親

鸞聖人も『教行信証』等で「無」よりも「无」の字のほうを圧倒的に多く用いられており、名号本尊でも同じであります。しかし先にも触れましたように、「仏」のほうは必ず正字の「佛」を使っておられます。このように聖人が文字にこだわっておられるように見受けられるのは、やはり注目に値すると思います。

後の『蓮如上人御一代聞書』には「南无の字は聖人の御流義にかぎりてあそばしけり。(中略)しかれば南无阿弥陀佛を本とすべしとおほせられ候なり」(『浄土真宗聖典全書』巻五、五三三頁)とあります。蓮如上人が書かれた六字名号の中で、楷書体のものは宗祖の用法に準じているようですが、現在多く残っている草書体の名号は、すべて「南無阿弥陀仏」とあって「無」と「仏」が宗祖の用法と違っています。これは、草書体という理由によるのでしょうか。やはり注意されることであります。

2 方便法身の尊号

ところで、親鸞聖人の真筆名号の中で、専修寺の八字名号と十字名号の二幅に裏書のあることが、近年になって分かりました。そこには「方便法身尊号」と書かれており、「法」の字は親鸞聖人が好んで使われた難しい古体字で書かれております。聖人が八十四歳のときに書かれたことを示す年記もあり、聖人の真筆であることが確認されています。

この裏書は、本尊としての名号が「方便法身」の尊い名号であることを示したものです。親鸞聖人はこの「方便法身」について、真筆本『唯信鈔文意』の中で次のように述べておられます。

「法性すなわち法身なり。法身はいろもなし、かたちもましまさず。しかれば、こゝろもおよばれず、ことばもたへたり。この一如よりかたちをあらわして、方便法身とまふす御すがたをしめして、法蔵比丘となりた

まひて、不可思議の大誓願をおこしてあらわれたまふ御かたちおぼ、世親菩薩は、盡十方无碍光如来となづけ
たてまつりたまへり。この如来を報身とまふす。誓願の業因にむくひたまへるゆへに、報身如来とまふすな
り。」(『浄土真宗聖典全書』巻二、七〇二頁上段)

この文を少しくだいて申しますと、はじめの「法性」というのはすべての存在の本性という意味で、真理、真如、
眞実を指しますから、「法身」はそのような法性そのものから成り立っているということです。法身は色もなく形
もない。したがって、心に思うことができないし、言葉にあらわすことができないのですが、阿弥陀如来はこの
「一如」すなわち真如、眞実の世界より形をあらわして「方便法身」というお姿を示し、法蔵菩薩と名のられて、
思いはかることのできない大いなる誓願を立てて出現されたのです。そのお姿を世親菩薩は「尽十方無碍光如来」
という言葉で名づけられたのです。この如来を「報身」とも言いますが、これは誓願を立て修行を重ねて成就した
報いとして得られた仏身ですから、報身如来と申し上げるのです。——およそ、このような意味の文ですが、要す
るに、眞実の世界というのは、本来形や言葉を超えたものですから、私どもにはなかなか理解しがたいので、形を
あらわし、言葉である名を示して、私どもを眞実の世界へ導くためにあらわれたのが、方便法身としての阿弥陀仏
である、ということがあります。同様なことが、眞筆本『一念多念文意』にも出てきます。

「この如来を、方便法身とはまふすなり。方便とまふすは、かたちをあらわし、御なをしめして、衆生にしら
しめたまふをまふすなり。すなわち阿弥陀仏なり。」(同上、巻二、六七四頁)

これは、方便法身という語が出てくる箇所だけをピックアップしたわけですが、「方便」というのは、仏が衆生
を救済するときに用いられるすぐれた手立て、巧みな方法ということであり、また「報身」というのは、「方便法
身」という表現を大乘仏教一般の仏身観で用いられる用語で示されたものであります。

親鸞聖人が名号本尊について、このように方便法身の尊号であることを明説されたのは、その後の浄土真宗における本尊の基本的考え方となっています。ですから、阿弥陀如来の絵像も、本尊としては方便法身の尊い形であると思なされているのです。また木像の本尊も同じであって、やはり方便法身の尊い形を示した仏像であるということになるのであります。

3 「正信偈」の本尊

以上述べました名号本尊のうち、六字の名号以外の八字・九字・十字の名号は、いずれも光をもって表現した名号、すなわち光明無量の仏名ということになります。これは、親鸞聖人が真実報土の浄土を「無量光明土」（『浄土真宗聖典全書』巻二、一五五頁）と呼び、同じく光をもって表現されている点にもうかがわれます。この「無量光明土」は『無量寿経』の漢訳異本である『無量清浄平等覚経』（同上、巻一、二四一頁）に出る訳語ですが、この箇所にはサンスクリット原典があり、それによると、元来は「無量の光明をもてる方（アマタプラバ||アマターバ）」の「国」土」という意味ですが、いずれにしても「無量なる光明（仏）の世界」をあらわすことには変わりありません。このように聖人は、仏身・仏土について光明無量を重視されていますが、それでは、光明無量だけで寿命無量には触れておられないかと申しますと、決してそうではありません。前に触れましたように、『西方指南抄』などを見ますと、聖人がサンスクリット語の「阿弥陀」が「无量寿」と「无量光」の二つを合わせた仏であると了解しておられたと思われませんが、同じことは、『教行信証』「行巻」末尾の「正信念仏偈」（「正信偈」）にもうかがわれます。

広く知られていますように、「正信偈」の冒頭は「帰命無量寿如来 南無不可思議光」の二句で始まりますが、

ここには無量寿と無量光の二つの仏名があげられていますから、まさしくインドの「南無アマターユス〔仏〕」と「南無アマターバ〔仏〕」に当たります。「帰命無量寿如来」は名号本尊として用いられることはありませんが、「南無不可思議光」は先に言及したように、曇鸞大師の文言をそのままお使いになっておられます。これに、「仏」あるいは「如来」の語を加えれば、八字の名号、九字の名号となるわけです。「正信偈」は七言の形式ですから、冒頭の二句は、いわばそれぞれ七字の名号になるとも言つてよいでしょう。聖人真筆の坂東本によりますと、この二句は「無量寿如来に帰命し、不可思議光に南無したてまつる」と訓読されていますから、これは最初に聖人が阿弥陀如来への切なる帰敬のこころを表白されたものであると解されています。そのように理解するのは当然であつて、伝統的にもそうでありますし、現にそうであります。

しかし、名号本尊という点から考えますと、南無阿弥陀仏という六字の音写語をサンスクリット語であらわせば、「南無アマターユス〔仏〕」と「南無アマターバ〔仏〕」の二句になると同じように、これを意識の漢語であらわせば「帰命無量寿如来 南無不可思議光」の二句になりますので、これは「無量寿如来に帰命し、不可思議光に南無したてまつる」という名の仏、言い換えれば「南無阿弥陀仏」という本尊を指していると解することができます。そういたしますと、文脈の上では「帰命無量寿如来、南無不可思議光（という名の仏）は」という主語になり、次の「法蔵菩薩因位時」以下の文にかかると読めます。つまり、「正信偈」の主語としての名号本尊が説かれたものと解することができます。

先ほど、宗学院の報恩講勤行で「念仏正信偈」のお勤めがありました。が、頂戴いたしましたお勤め本にも記されていますように、これは親鸞聖人の『浄土文類聚鈔』に出てくる偈文で、「正信偈」（「正信念仏偈」）と名称も内容も非常に類似しております。ただ「正信偈」の「帰命無量寿如来 南無不可思議光」の二句に相当する句は、この

「念仏正信偈」では「西方不可思議尊」という一句になっており、これは言うまでもなく阿弥陀仏を指しています。ここには「帰命」とか「南無」という言葉はありませんが、「正信偈」と同じように、聖人が帰敬のこころを表明したものだと思われるのが伝統的に行われていたようであり、しかしこの「念仏正信偈」の文脈から見ると、この一句は「西方不可思議尊は」というように主語として読み、次に出る「法蔵菩薩因位中」以下にかかると思われるのがむしろ自然であります。先ほどのお勤め本でも、そのように説明されています。ただ、これが「正信偈」との大きな違いの一つと書かれています。私にはむしろ「正信偈」の冒頭二句のほうを「念仏正信偈」と同じく主語としてのご本尊をあらわしたものと見るべきではないか、と思うのであります。

「正信偈」の主語が「帰命無量寿如来 南無不可思議光」の二句であるという説は、すでに出雲路修氏の『親鸞へことば』の思想（岩波書店、二〇〇四年）という本に出ています。著者は個人的には存じ上げませんけれども、現在大谷派のご住職であり、国文学のご専門の方のようであり、また、「正信偈」の訓読について、「トイヘリ」という段落を示す語が頻出する点に着目され、坂東本の読み方は「帰命無量寿如来ニ帰命シ、不可思議光ニ南無シタテマツル」という名の仏」という意であり、「法蔵菩薩ノ因位ノ時……」以下の文の主語として解すべきであると主張されています（同上、一一九―一三三頁）。私はなるほどと思いました。出雲路さんは国語学的に考察されているのですが、私は名号論の上から「帰命無量寿如来 南無不可思議光」は南無阿弥陀仏という本尊をあらわしているのですが、私には「ご本尊は法蔵菩薩の因位の時……」と、こう書かれたのではないかと思うのです。ですから、結論は「念仏正信偈」の「西方不可思議尊」という主語と同じであり、出雲路説に賛同するわけであり、しかし、これは議論があることとごいしましょうし、「正信偈」という親鸞聖人の代表的な大切な偈文ですから、今後よろしくご検討下さいませよう、私からも提案させていただく次第でございます。

4 本尊は南無阿弥陀仏

さて、もう時間がなくなりましたが、最後に「本尊は南無阿弥陀仏」ということを申し上げます。浄土真宗の本尊というのは、要するに名号でも絵像でもあるいは木像でも、すべて方便法身をあらわしたものであり、言葉としては南無阿弥陀仏の六字に収斂されると言うことができます。本願寺派では「浄土真宗の教章」を拝見しますと、本尊として「阿弥陀如来」とあり、括弧して（南無阿弥陀仏）と書いてあります。高田派も同じです。大谷派ではそのようなことを書いていなくて、「阿弥陀如来」だけです。私は括弧して（南無阿弥陀仏）を加えたほうがよいと思っっています。ちなみに、大谷派には『真宗聖典』というのがあります。こちらの本願寺派でお出しになっている『浄土真宗聖典』はすでに改訂されておりませんが、大谷派は三十五年ほど前に出た聖典で、その後改訂作業は一度も行われておりません。改訂の必要性を当局に申しあげてはいるのですが、近い将来漸く聖教編纂室が設けられることになりました。改訂作業に関連して、本尊の問題につきましても本願寺派を見習って「阿弥陀如来（南無阿弥陀仏）」と明記したほうがよいのではないかと私は考えております。

ところで、本尊が南無阿弥陀仏であるという場合、いつも引き合いに出されるのが『蓮如上人御一代記聞書』の「他流には、名号よりは絵像、絵像よりは木像といふなり。当流には、木像よりは絵像、絵像よりは名号といふなり」（『浄土真宗聖典全書』巻五、五四七頁）という文言です。これは蓮如上人の頃には、仏教各宗で木像や絵像の本尊を礼拝することが広く行われていたのに対して、浄土真宗では、それよりも文字で書かれた名号こそがご本尊にふさわしいと言われたことを伝えたものです。

しかし、現在では本山や末寺の本堂では木像の阿弥陀如来が安置されていますし、一般のお内仏では絵像の阿弥陀如来が掲げられています。ただ、浄土真宗のご本山では、親鸞聖人の木像（御真影）を安置する御影堂と、本尊

阿弥陀如来を安置する阿弥陀堂の二つのお堂があります。そして、御影堂が阿弥陀堂よりも大きい。だから一般の方々は、まず御影堂にお参りされます。その御影堂の真中にいらっしやるのが親鸞聖人です。聖人がもし今おられたらビックリされることでしょう。親鸞聖人があたかもご本尊のようになっているからです。しかし、御影堂はもとは親鸞聖人の御廟（墓所）から始まったお堂ですので、御真影が内陣中央におかれるわけです。御影堂には、本願寺派も大谷派も同じと思いますが、十字之間、九字之間が内陣脇におかれており、大谷派では、現在、九字之間に仮阿弥陀堂が設けられております。

さて、『蓮如上人御一代記聞書』には「本尊は掛けやぶれ、聖教はよみやぶれと、対句に仰せられ候ふ。」（『浄土真宗聖典全書』巻五、五二七頁）という、よく知られた文言があります。ここで「聖教はよみやぶれ」とありますのは、聖教すなわち聖典をボロボロに破れるまで繰り返し読みなさいということですからよく分かります。しかしその対句として言われる「本尊は掛けやぶれ」とはどういうことでしょうか。これは少し分かりにくいのですけれども、蓮如上人の時代はまだ寺院組織が明確ではなく、聞法の集会の場所ごとに、本尊として名号を軸にして掛けてお参りすることが多かったでしょう。蓮如上人は、始めは九字・十字の名号もお書きになっていたようですが、後には六字の名号をたくさんお書きになって、今日でも多く残っています。この六字の軸を掛けてお参りをする。そして、お参りが終わったら本尊のお軸を巻き上げて、しまっておき、次にお参りするときにお軸をかける。こうしたことを繰り返しやっていけば、本尊のお軸は傷んで破れてきます。それを「本尊は掛けやぶれ」と言われたのではないかと思えます。そうしますと、この文言は繰り返し繰り返し本尊にお参りし聞法しなさいということ、南無阿弥陀仏という本尊は決して飾り物や置物ではなく、お参りをするところに現においてになるのだということ、このことを示されたのではないかと思えます。これは本尊が単なる礼拝の対象物ではないことを巧みに示唆された

もので、浄土真宗の本尊を考える場合、たいへん大切なことであります。

私どもは本尊と言いますと、何か尊い物、場合によっては一種の美術品として、「立派なご本尊ですね」と、そんなことで礼拝したり、何かをお願いしたりしてはいませんか。しかし、浄土真宗ではそうではありません。木像や絵像の阿弥陀如来には、南無の語は付いておりませんが、本来は南無阿弥陀如来と申し上げてもよいと思います。浄土真宗の本尊は南無阿弥陀仏であり、このことを明確に示されたのは親鸞聖人でありますが、このような本尊に向かうときの心構えについて、近年曾我量深先生が分かりやすく説かれているのでご紹介いたします。曾我先生は、大谷派ではいわゆる近代教学の泰斗として高く評価されている方です。ただ「法蔵菩薩は阿頼耶識なり」という立言など、仏教学一般の研究をしている者には聊か思いが及ばない所説もありますが、しかし真宗教学の核心を明確にズバリとおっしゃられていますので、大谷派では現在多大な影響力をもつ先達であります。その曾我先生が一九五六（昭和三十一）年正月にアメリカの東本願寺ロサンゼルス別院で書き残された「仏様とは」という題の墨跡がござります。その本文を拝見いたしますと、「仏様とはどんな人か」という問いから始まっており、これに対して、「仏様は、われは南無阿弥陀仏と申すものであると名のつておいでになります」と答え、さらに「その仏様はどこに居られるか」と問うて、「われを南無阿弥陀仏と念じ称える人の直前においでになります」とおっしゃっています。これは浄土真宗の本尊観を端的にわかり易く説かれたものです。小冊子『真宗における本尊』には全文を引用しておきましたので、もしご関心がありましたら、ご覧いただきたいと思えます。

こうしてみますと、浄土真宗の教えをいただく私どもは、本尊である阿弥陀如来を礼拝し讃嘆し感謝して、高らかにお念仏するとき、南無阿弥陀仏と名のつておられるご本尊が私どもの前にあらわれて呼びかけられている、それはたらきによって、浄土への往生が定まり、かならず仏となるべき身にさせていただくと思しきかと思存

じます。私は、浄土真宗の本尊というのは仏典における「本」の用法と、如来の本願のはたらき（他力）の意義を勘案して「根本の尊いはたらき」と理解しております。その「根本の尊いはたらき」そのものに遇って、私たちは南無阿弥陀仏という念仏を頂くのであり、「念仏成仏これ真宗」と言われた親鸞聖人の教えの核心に触れさせていただく、と思う次第でございます。

ちょうど時間になりました、これで私の話を終えさせていただきます。